

翌日からは、空地に張られた大きなテントの中での生活が始まりました。亡くなった僚友の遺体の捜索も続けられていました。亡くなった多くの方のことを思うとき、今も深い悲しみを覚えます。あの大きな津波と暴風の中のできごと、その状況は、まさに「阿鼻叫喚（あびきょうかん）」とはあのようなことを云うのではと思えるようなものでした。

大きなテントの中に仮の診療室、治療室のようなどが設けられ、傷の手当などをして下さいました。その日から二日後だったと思いますが、大島青松園（おおしませいしょうえん）から職員、自治会役員の方々が救援の為に来て下さった時はほんとうに嬉しかったです。救援船をチャーターして頂き、生存者の中から特に弱い者、不自由な者を優先して預かろうという申し出を聞いて涙の溢れる思いをしました。私もその中に入った一人でした。その青松園のチャーター船には、青松園へ行く者が五十名、愛生園へ行く者が五十名、合わせて百名の者が乗船しました。九月末には、青松園がまた救援船をチャーターしてくださり、第二陣では青松園、愛生園にそれぞれ二十名程お世話になりました。生存者四百名余りの者は全国六ヶ所の療養所に分散委託されました。

青松園にお世話になった者は七十名でした。三年九ヶ月の委託療養中は本当に親切にして頂いたことを感謝しています。私は青松園で委託療養中にニコルソン宣教師のお導きによってキリスト教の洗礼を受けました。このことは終生忘れることのできない喜びです。

光明園が開園して一番最初に帰園したのは、遠い青森の北部保養院委託者でした。私たち青松園委託者は、一番最後に帰園しました。昭和十三年七月のことです。

帰園してからは「ここが自分の住む園や」という気持ちで皆が一つになって毎日毎日奉仕作業をして石コロを片付けて道を作ったものでした。夕食後でも「おい、奉仕やで、奉仕やで……」と云いながら寮から出てきて、道具があまりないので手で石を除き、モッコで海岸近くまで捨てに行ったりしました。夏で日も長く、よく働いたものです。帰園してから一年ぐらいは、そうした奉仕作業に明け暮れる日々でした。くたびれもしたけれど、「光明園を住み良いところにしよう、よその園に追いつけ追いこせ」という意気ごみのようなものが園内にありました。年齢も若かったしね、皆の気持が一致していました。風水害で多くの僚友を失ったこと、分散委託を経ての開園、そうしたさまざまな思いが「光明園をより良い園にしたい」という気持ちに結びついていったんだと思います。